

# 社会の持続可能性と ウェルビーイング



京都大学名誉教授  
広井 良典

## はじめに

### ——「ウェルビーイング」への関心の高まり

最初に大きな時代認識から始めさせていただくと、これからの時代においては「持続可能性(サステナビリティ)」と「幸福(ウェルビーイング)」の二者が、いわば“車の両輪”のような形で中心的な重要性を担っていくと私は考えている。

すなわち一方で、これまでのような「GDPの限らない拡大・成長」のみを追求するような経済社会のありようが、地球環境や資源の有限性に直面する中で「持続可能性」に軸足を置いた方向へ転換していく。他方、このことと平行に、では(GDPに代わる)新たな「価値」ないし「評価軸」は何かという問いが浮上する。そこにおいて、トリプル・ボトムラインと呼ばれる「環境・経済・社会」の三者を柱とする多元的な価値軸とともに、「ウェルビーイング(幸福)」というコンセプトが立ち上がるのである。

私自身は、ささやかながらここ10年以上にわたり幸福度指標をめぐる政策展開に若干の関わりをもつ機会を得てきたが、ここでは以上のような関心を踏まえながら、「ウェルビーイング」をめぐるテーマを幅広い視点から考えてみたい。

## 1 ウェルビーイングをめぐる政策展開

もともとこうした話題への注目は、すでにある程度知られているように、ヒマラヤの麓に広がる小国ブータンが1970年代から唱えている「GNH(グロス・ナショナル・ハピネス、国民総幸福量)」に一つのルーツを持つものだった。このようなテーマに対する関心はリーマン・ショックが起こった2008年頃から新

たな局面に入り、たとえば2010年には、フランスのサルコジ大統領(当時)の委託を受け、ノーベル経済学賞を受賞したスティグリッツやセンといった著名な経済学者が「GDPに代わる指標」に関する報告書を刊行している(Stiglitz他(2010))。

日本での動きはどうか。日本の場合、内閣府に設置された「幸福度に関する研究会」の報告書が2011年にまとめられているが(私も委員の一人として参加)、実は日本において特徴的なのは、意外にも地方自治体がこうした動きに先駆的に取り組んできている点である。

もっとも先駆的な展開を進めたのは東京都荒川区で、同区は2005年という早い時期に「GAH(グロス・アラカワ・ハピネス。荒川区民総幸福度)」を提唱するとともに、2009年には区独自のシンクタンク(荒川区自治総合研究所)を設立し、住民の幸福度に関する調査研究や指標づくりに着手し、2012年には6領域、46項目にわたる独自の幸福度指標を策定し公表している。加えて指標づくりだけにとどまらず、並行して「子どもの貧困」、「地域力」といったテーマを順次取り上げ、幸福度に関する研究を具体的な政策にフィードバックさせる試みを行ってきたのである。

さらに、以上のような展開に共鳴した全国各地の市町村が、「幸せリーグ(住民の幸福実感向上を目指す基礎自治体連合)」というネットワークを発足させ(2013年)、幸福度に関する指標づくりや政策展開について様々な連携を進めている(現在約60の市町村が参加しており、私は顧問の一人)。

ちなみに、都道府県のレベルでも幸福度指標に関する様々な動きが進んでいるが、特に幸福度指標に関する展開を丹念な調査とともに進め、かつそれを政策に具体的につなげる形で展開してきている県として岩手県が挙げられる。同県は2016年から17年に

かけて有識者からなる「岩手の幸福に関する指標研究会」を設置して検討を行い、独自の幸福度指標を策定すると同時に、さらにその内容を2019年3月に策定された「いわて県民計画」に盛り込んだ。

そして最近では、いわゆる「デジタル田園都市」に関する政策の一環として、「地域幸福度(Well-Being)指標」を中心に国レベルでも自治体での幸福度指標

策定への支援が強まるほか、経済界も(SDGs等との関連を含め)ウェルビーイングに関するテーマに関心を向けるなど、ウェルビーイングないし幸福度指標に関する政策は新たな段階に入っていると言えるだろう。以上のような展開をまとめたのが(図1)である。

図1 日本におけるウェルビーイング/幸福政策の展開—その3段階—

- **第1段階(2005年～10年頃) “形成期”**
  - 荒川区「GAH」提唱(2005年)→荒川区自治総合研究所(2009年)
  - GDPに代わる指標に関するサルコジ委員会報告(2009年)
  - 内閣府「幸福度に関する研究会」(2010年)
- **第2段階(2010年～19年頃) “普及期”**
  - 市町村による「幸せリーグ」発足(2013年)
  - 「岩手の幸福に関する指標研究会」(2016-17年)[→「いわて県民計画」(2019年)]
- **第3段階(近年) “発展期”**
  - 民間企業・経済界の関心高まる
  - SDGs、持続可能性、資本主義のあり方をめぐる議論等とのリンク
  - 「デジタル田園都市国家構想」での地域幸福度(Well-Being)指標の展開

## 2 ウェルビーイングの重層構造 —生命・つながり・自己実現

### (ウェルビーイング/幸福をめぐる3つの次元)

ウェルビーイングや幸福度に関する大きな流れを概観したが、こうした話をする、ある意味で当然のことながら、次のような根本的な疑問が浮かんでくるだろう。それは、

「幸福」は個人によってきわめて多様かつ「主観的」なものであり、それを数字で指標化することなどできないし、ましてやそれを行政が「政策」に活用するといったことはありえないのではないか、

という疑問である。これはごくもったもな問いであり、このテーマだけで一冊の本になるような広がりや深さを持つような話題だが、基本的な論点はある意味でシンプルであり、以下この点について考えてみたい。

ここでの議論のポイントは、ウェルビーイングないし幸福をいくつかの層からなるものとしてとらえるという点だ。

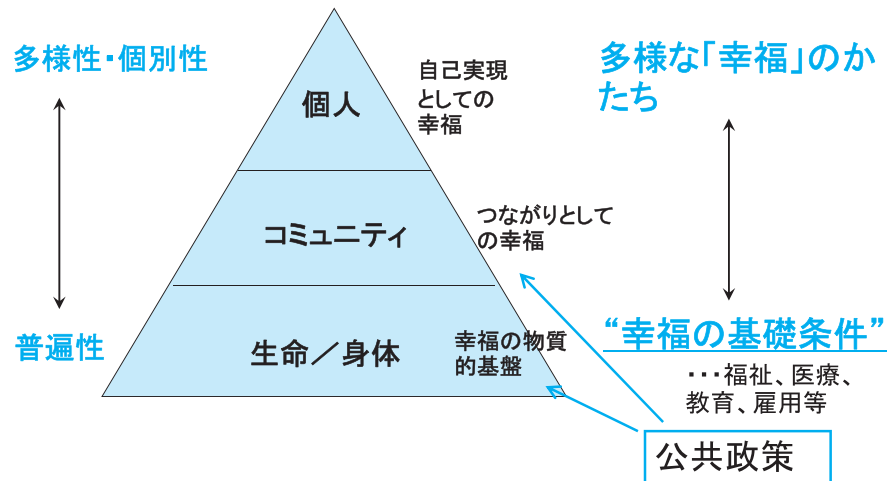
この点について、(図2)を見ていただきたい。これはいま述べた「ウェルビーイング/幸福の重層構造」

を示したもので、まずピラミッドの図の土台のほうは「生命/身体」に関わるような次元である。それは毎日の基本的な衣食住が満たされているとか、身体の健康や安全が保たれているといった基本的なレベルであり、これは人間が生きていくにあたり不可欠のニーズに対応するもので、「ウェルビーイング/幸福の物質的基盤」とも言える。それは「ウェルビーイング/幸福の基礎条件」あるいは「土台」をなすものであり、しかもこうした次元は個人差を超えて大方共通していると言える。

以上が主として「個体」レベルに関わるものとすれば、真ん中にあるのは「コミュニティ」あるいは他者とのつながりに関わる次元である。言うまでもなく、人間はコミュニティあるいは社会的関係性の中で生きる存在であり、コミュニティあるいは他者との関係性から生まれる情緒的安定や帰属意識、「承認」や誇り、自尊心といったものが、人間の「幸福」にとってきわめて重要な位置を占めているのは確かなことだろう。

ちなみに、国連の関係組織である「持続可能な発展ソリューション・ネットワーク(SDSN)」が数年前から『世界幸福報告(World Happiness Report)』を毎年公表しているが、その2025年版では日本は55位で、

図2 ウェルビーイング / 幸福の重層構造と公共政策



(注)労働との関連:「生活の基盤としての労働」→「つながりとしての労働」→「自己実現としての労働」

かなり低いポジションにある。この報告書はそれをいくつかの要素に分解して説明しているのだが、日本において特に低い項目の一つに「社会的サポート (social support)」という点があり、これは“困った時に助けしてくれる人がいるか”という点に関するものである。まさにここで論じている「コミュニティ」や「つながり、関係性」に関わる点であり、現在の日本社会の根本にある課題と言えるだろう(広井(2009)参照)。

ウェルビーイング/幸福の重層構造における最上層は「個人」に関わる次元である。これは「自由」や「自己実現」「創造性」といった価値に対応するものだが、ここで重要な点は、想像できるようにこの層に至ると個人の「多様性」ということが前面に出ることだ。したがってこの次元に注目すれば、先ほどの幸福度指標への「疑問」にも示されていたように、まさに“ウェルビーイング/幸福のかたちは人によって多様”となり、一律の尺度をあてはめることは困難になる。

人生の姿は無限に多様であり、それぞれの人の人生の「幸福」を、一つの物差しで評価できるはずなどないというのは、他でもなくこの次元に対応していると言える。

### (ウェルビーイングと労働)

それでは以上のようなウェルビーイングの各層と「労働」との関連はどうか。やや単純化した整理となるが、大きくは

- 「生命/身体」のレベル→「生活の基盤としての労働」
- 「コミュニティ」のレベル→「つながりとしての労働」
- 「個人」のレベル→「自己実現としての労働」

という把握が可能と思われる。

最初の「生活の基盤としての労働」とは、文字通り労働を通じて日々の衣食住の基盤が確保されるということであり、それはまさにウェルビーイング/幸福の土台でもある。しかも、英語の「ライフ」が「生活」「人生」という意味と同時に「生命」を含意しているように、そうした労働によって実現されるのはまさに「生命」(の維持)そのものとも言えるだろう。

2番目の「つながりとしての労働」は人間にとってきわめて重要な次元であり、それは労働がそれ自体において人との「つながり」の通路をなしているという意味だけではない。それはより広く、労働を通じて、自分が社会に貢献しているという手ごたえを得たり、他者から評価されることで自分自身の存在が確認されたり、自分の労働の成果物によって誰かが喜ぶ顔を見て単純にうれしさを感じたり等々といった、他者との「関係性」に関わる内容を広く含んでいる。

そして最後の「自己実現としての労働」は、先ほどウェルビーイングとの関連で述べたこととも関連するが、他者からの評価や社会的な関係性をさらに超えて、自分自身が好きなこと、深めていきたいこと、極めたいこと等々を追求し、創造していくという次元に関わっている。

こうした視点を含め、ウェルビーイングと労働がどのような関わりをもつかを掘り下げていくことは、きわめて現代的で重要なテーマと言えるだろう。

### (ウェルビーイングと公私の役割分担)

以上、「ウェルビーイング/幸福の重層構造」に関して述べてきたが、ではこれは先ほど言及した、幸福に関する「政策」は可能かという問いや、幸福をめぐる

ての「公共政策」の役割はどうあるべきかといった点とどう関係してくるだろうか。

ある意味で、その答えは以上に述べた「ウェルビーイング/幸福の重層構造」についての説明の中にすでに含まれている。つまり、政府ないし行政が「幸福の公共政策」としてまず重点的に取り組むべきは、他でもなく先ほど「幸福の基礎条件」あるいは「幸福の土台」と呼んだ、ピラミッドの下部の「生命/身体」に関わる領域に関する保障であるだろう。

具体的にはそれは、医療・福祉などの社会保障、人生における「共通のスタートライン」を保障する教育、雇用や住宅などに関するセーフティネット等々である。実際、先ほど紹介したように幸福度に関する政策をパイオニア的に進めてきた東京都荒川区が、最初に取り組んだテーマも「子どもの貧困」だった。人生における「共通のスタートライン」の保障であり、それはまさに「ウェルビーイング/幸福の基礎条件」である。

このように、政府あるいは公共政策がまずもって取り組むべきは「ウェルビーイング/幸福の重層構造」のうちの土台部分であるが、特に近年、ピラミッドの真ん中の「コミュニティ」の重要性が様々な面で注目されており——たとえば、高齢者がコミュニティでの様々な関わりを持っていることが心身の健康ないしウェルビーイングにつながり、“介護予防”の効果ももつといった例——、そうした「コミュニティ(支援)政策」もウェルビーイングをめぐる公共政策として重要な意味をもっていることを確認しておきたい。

### 3 ウェルビーイングと福祉国家

#### (格差・貧困とウェルビーイング)

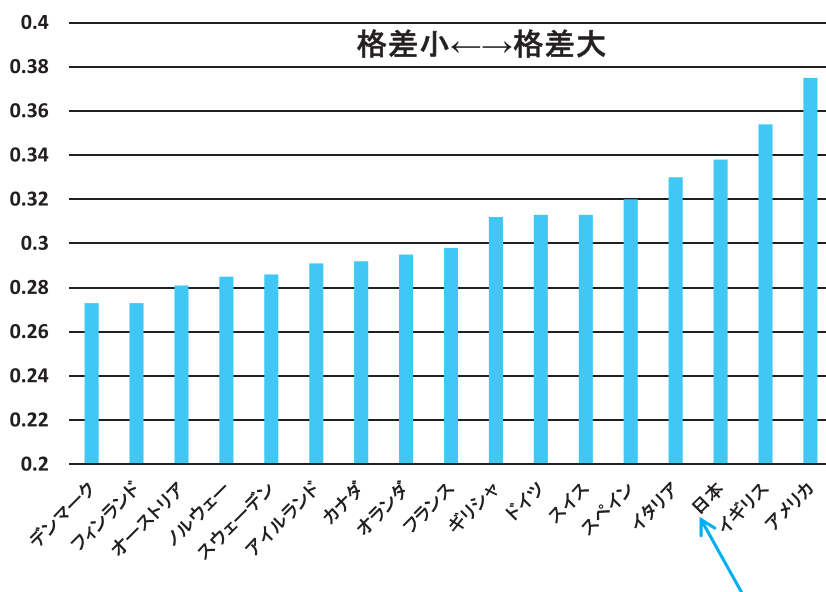
ところで、近年ウェルビーイングに関する議論が活発になる中で、にもかかわらず日本において必ずしも十分に論じられてこなかった重要な話題がある。それは、社会における「平等」あるいは「格差」の度合いと「ウェルビーイング」や「幸福」がどのような関わりをもつかというテーマである。

しばらく前から、人々の幸福度の国際比較や、それに基づくランキングが様々な形で公表されているが、概して北欧諸国がそうした比較において上位に位置していることはしばしば認知されてきた。たとえば、先述の『世界幸福報告(World Happiness Report)』の2025年版では、幸福度の国際比較においてフィンランド(1位)、デンマーク(2位)、アイスランド(3位)、スウェーデン(4位)、ノルウェー(7位)という具合に、北欧諸国が上位に名を連ねている。

一方、北欧諸国と言えば、その“高福祉・高負担”型の「福祉国家」政策において広く知られており、その帰結として、社会における高い「平等」を実現している。

(図3)は経済格差の度合いを表すジニ係数の国際比較だが、北欧諸国が図のもっとも左に位置しており、すなわち平等度をもっとも高い国々であることがわかる。大きな傾向として、それに次ぐのが主に大陸ヨーロッパ諸国であり、それ以降、次第に経済格差が大きい国々として南欧諸国などが位置し、その次に日本、

図3 所得格差(ジニ係数)の国際比較(2021年)



(注)ここでの所得は再分配後の可処分所得。

(出所)OECD Income Distribution Database (IDD)より筆者作成。

イギリスと続き、もっとも格差が大きいのがアメリカとなっている。

実はこれらはその国の社会保障の充実度と大きく関連している。日本について見れば、1980年代頃までは日本の経済格差は上記の「大陸ヨーロッパ」並みで、どちらかという先進諸国の中で格差の小さい国だった。しかし90年代半ば頃から日本の経済格差は徐々に広がり、現在では先進諸国の中でもっとも格差が大きい国のグループに入っている。しばらく前から「親ガチャ」、つまりどのような親のもとで生まれたかという、出自の環境によって人生がほとんど決まっているという感覚が若い世代を中心に広がっているという事実は、以上のような経済格差をめぐる客観的状況とも関連しているだろう。

話題を格差と幸福度との関連に戻すと、基本的な事実として、北欧諸国のようにもっとも平等度が高い国において、概して人々の幸福度がもっとも高い傾向にあるという点は、まず押さえておいてよいだろう。もちろん、これはごくラフな相関を示しているに過ぎず、ここから何らかの因果関係が結論づけられるものではない。

では、より実質的なレベルで、平等あるいは経済格差と幸福／ウェルビーイングとの間にはどのような関係性があるのか。

このテーマには様々な側面があるが、主に心理的なレベルから出発して、こうした話題についてもっとも包括的な議論を行ってきた研究者はイギリスの社会疫学者リチャード・ウィルキンソンらである(ウィルキンソン&ピケット(2010)、同(2020))。

ウィルキンソンらの近年の議論の骨子は、社会における経済格差が一定以上のレベルを超えていくと、そこでの強い競争圧力や不安等から心理的なストレスが大きく増加し、結果的にそれは心身の健康にもマイナスに働き、全体として個人の「ウェルビーイング/幸福」を低下させていくという内容である。

あるいは、昨今の日本の状況なども意識するならば、経済格差が拡大し、社会の分断が進むとともに現状に対する不満・不信が高じていくと、ストレスとともに他者への攻撃性も強まり、たとえばその一端はSNS等での誹謗中傷のような形で示され、「ウェルビーイング」とは正反対の方向が加速することになるだろう。

紙面の都合もあり指摘にとどまるが、以上のような点を踏まえ、現在の日本においては、私自身が「人生前半の社会保障」と呼んで論じてきたような(広井(2006)、同(2023))、雇用、教育、住宅等の多方面における若い世代に対する支援策や、それらを通じた先

述の「人生における共通のスタートライン」の保障が、ウェルビーイングの基盤整備としてきわめて優先順位の高い課題と考えられる。それは若い世代の雇用・生活をめぐる状況の改善を通じて、人口減少問題の緩和や社会の持続可能性にも貢献するだろう。

本稿では、ウェルビーイングをめぐる政策展開の概観から始めて、ウェルビーイング/幸福をめぐる重層構造と公私の役割分担、労働や福祉国家との関わりなど、ウェルビーイングをめぐる現代的な課題について幅広い角度から論じてきた。

ウェルビーイングをめぐる様々なテーマを、単に個人の心理的レベルのみにとどめるのではなく、社会システムのあり方、そして「ウェルビーイング(幸福)政策」という観点から考え、必要な政策展開やシステム変革を進めていくことが、いま日本において何よりも求められているのである。

#### 【文献】

- ウィルキンソン&ピケット (2010)『平等社会』、東洋経済新報社。
- 同 (2020)『格差は心を壊す』、東洋経済新報社。
- 広井良典 (2006)『持続可能な福祉社会』、ちくま新書。
- 同 (2009)『コミュニティを問いなおす』ちくま新書。
- 同 (2023)『科学と資本主義の未来』、東洋経済新報社。
- ブルーノ・S・フライ他 (2005)『幸福の政治経済学』、ダイヤモンド社。
- Stiglitz, Joseph E., Sen, Amartya and Fitoussi, Jean-Paul (2010), *Mismeasuring Our Lives: Why GDP doesn't Add Up?* The New Press.